山寺芭蕉記念館だより

山形県指定有形文化財《紅花屏風》（部分図）青山永耕 筆 江戸時代後期（19 世紀）

●事業報告　特別展「芭蕉とその時代」

●アプローチ・芭蕉＆日本文化
子規「はて知らずの記」の意味

●収蔵品紹介　紫式部『源氏物語』伝説による俳画と賛

No.36
2025年3月発行

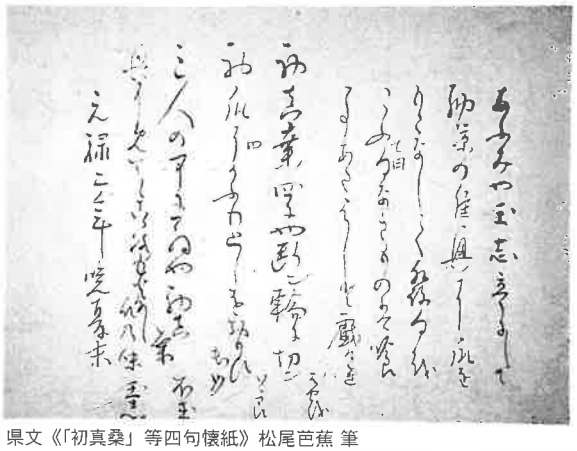
事業報告

山形市制施行135周年記念・山寺芭蕉記念館開館35周年・芭蕉生誕380年記念

特別展 芭蕉とその時代

―江戸時代の文学・芸術、そして旅―

俳人・松尾芭蕉は、深川への隠棲や「おくのほそ道」の旅などを経て、俳諧を芸術の域まで高めることに成功します。芭蕉の知識や感性を育んだ江戸の文化は、どのようなものだったのでしょうか。当展は、芭蕉の俳諧と共に、江戸時代の文学・美術・旅など、芭蕉が生きた時代を見ることにより芭蕉文学の背景に迫ろうと、令和六年十一月二日から十二月十六日まで開催しました。



県文《「初真桑」等四句懐紙》松尾芭蕉 筆
江戸時代前期（17世紀） 本間美術館蔵

《雪斎宛沢庵消息》沢庵宗彭 筆
寛永7～9年（1630-32） ㊟長谷川コレクション・本館蔵

一 芭蕉の文学

連歌の一様式として始まった俳諧は、芭蕉以前には滑稽、戯れ、洒落を表現手段の中心に置いた言語遊戯でした。そうした中、芭蕉は江戸で俳諧宗匠として成功した後、世俗的価値観から脱するため深川に隠棲しつつ、旅を重ね、俳諧を芸術の域にまで昇華させました。ここでは、そうした芭蕉の文学の軌跡を再確認しました。

《東都名所 日本橋之白雨》歌川広重 画
天保前期（19世紀） 広重美術館蔵

二 江戸時代の手紙

江戸時代の手紙を、芭蕉の他に千宗旦や沢庵宗彭・与謝蕪村などを例に見ていきました。

《雪斎宛沢庵消息》からは、紫衣事件により上山に配流された沢庵が地元の人々と親交を育んでいた様子を窺うことができます。一方、《仏心宛蕪村書簡》からは、蕪村が俳諧摺物の入集を打診する様子など、当時の俳諧活動の一端を垣間見ることができます。

《旅行用心集》文化7年（1810） 最上徳内記念館蔵

三 江戸の旅

江戸時代には、諸街道の整備、宿場機能の充実などにより、旅の環境は本格的に発達して整っていました。旅には墨壺を備えた筆記用具の矢立などが携行され、他の用具を装った護身用具や路銀入れなども考案されていました。旅の手引書『旅行用心集』も出版され、旅の心構えや諸用具の紹介などの情報が盛り込まれていました。

四 江戸時代の美術

絵画の分野では、室町時代に始まり狩野探幽によって基礎を築かれた江戸狩野派が、理知的な構成に加えて瀟洒で淡白な独自の描写を獲得し、円山応挙や谷文晁など自派以外の絵画にも影響を与えました。芭蕉と交遊のあった英一蝶は初め狩野派に学びましたし、芭蕉の門人森川許六は彦根藩士でしたが、狩野派の絵師でもありました。

芭蕉没後は、俳人で絵師でもあった与謝蕪村が、日本南画という文人画の大成者となり、俳諧・書・画一体の俳画を表現方法として完成させました。

《雪中双鴉図》与謝蕪村 筆
安永五～六年（一七七六～七七） 慈光明院蔵

事業報告

山形市制施行135周年記念

企画展

お雛さまの美

― 山形に伝わるお雛さま ―

三月三日の節句に雛人形を飾る風習は江戸時代に生じ、その伝統は今日まで続いております。その雛人形は時代と共に豪華な装いや写実的な表現が加わり、その意匠も変化していきます。この展覧会では、主に江戸時代の雛人形を展示して、雛人形の様式の変遷を辿ろうと、令和七年二月二十一日から四月七日まで開催しました。

展示では、紙雛・立雛などの簡素な作りの雛人形から座雛の元禄雛への移り変わり、そこから享保雛・古今雛・有職雛の登場と辿りました。また紫宸殿を模した模型に雛人形を飾る御殿飾り、源氏枠飾りなどの雛飾りも公開しました。特に、今回は山形市内の国登録有形文化財田中家住宅に伝わった御殿飾りを、同家門外では初めて一般公開しました。

更に、山形県指定有形文化財《紅花屏風》により、雛人形に用いられる赤の裂地を染めるのに用いる紅花の生産と出荷の様子を見ると共に、雛人形の流通路の一つとしての弁財船の活動も紹介して、それらの歴史的背景を解説しました。

《御殿飾り》 明治～大正期　田中家住宅

《享保雛》 江戸時代　㊟長谷川コレクション

予告

特別展

㊟長谷川コレクション展

令和7年10月3日(金)～11月17日(月)

㊟長谷川家は江戸時代前期から続く旧家で、十八世紀半ば以降に成長発展した商家です。現在に至るまで本県経済の発展に多大な貢献をされる一方、美術に対する造詣も深く、書画等の名品を蒐集してこられました。そうした作品の一部は山形美術館や当館に寄贈されています。この度は、それら名品の中から選んだ貴重な美術作品を公開します。松尾芭蕉や英一蝶、正岡子規など各分野に大きな影響を与えた人物たちの名品の数々をご堪能ください。

《蟻通図》英一蝶 筆　江戸時代
㊟長谷川コレクション・本館蔵

予告

企画展

妖怪博覧会

令和7年7月18日(金)～9月2日(火)

妖怪は古来、様々な文学作品や絵画など芸術作品の題材となってきました。松尾芭蕉も『おくのほそ道』の中で九尾の狐（玉藻の前）の伝説の地を訪れて、それを記しています。

本展では妖怪の様々な表現をご紹介します。妖怪の日本文化の中での位置や、作者ごとの個性的な表現方法の妙などをご覧ください。

令和七年度は、大手町会場として最上義光歴史館でも、令和七年七月二日（水）～十月十三日（祝・月）の日程で開催します。

《東海道五十三對　桑名》
歌川国芳 画
江戸時代後期

事業報告

芭蕉翁生誕三八〇年記念

第67回 全国俳句山寺大会

蝉の声が届き始める令和六年七月十日、第六十七回全国俳句山寺大会は開催されました。数多くの名句を生み出してきた大会の選者は、「ランブル」主宰 上田日差子先生、「楽園」主宰 堀田季何先生、「小熊座」同人 渡辺誠一郎先生。地元選者として、「初蝶」同人「胡桃」主宰 鈴木正子先生、「古志」同人 伊藤 寛先生、「芯」同人 牧 静先生、「馬酔木」同人 伊藤 ふみ先生。

俳句大会の事前投句数は一〇三一句、当日の参加者数は五十四名でした。

大会式典は午前十一時より相馬周一郎山形市文化振興事業団理事長の主催者挨拶、村上武山形市文化創造都市課長の来賓挨拶、清原正田立石寺貫主の挨拶のあと、小中学生の部の表彰を行い、選者紹介、事前投句選評と続きました。

午後に入り、上田日差子先生による講演「上田五千石と山形」が行われました。上田日差子先生の父、俳人上田五千石先生が山形県内出羽三山や山寺等で詠んだ俳句について説明してくださいました。

引き続き、入賞した俳句の発表、選評、そして事前投句、当日句の表彰が行われ、入賞者には選者染筆の色紙や句入りのこけし等が贈られました。俳句大会は熱い高揚感を残し午後四時に幕を閉じました。

事前投句の入賞句は次の通りです。

上田日差子先生

山形市長賞

苔青し心澄みゆく立石寺

東根市　伊藤　幸

山形県俳人協会長賞

南溟に遺骨百万夏の果

東京都　野上　卓

山寺文化保存会長賞

床下をくぐる涼しさ五大堂

栃木県　松本　喜雄

山寺芭蕉記念館長賞

石段に吾を追ひ越す蟬の声

東京都　紫野　はづき

大会当日句で上田日差子先生の特選に選ばれた句

万緑に千のきざはし隠れをり

山形市　鹿野　明彦

「第16回山寺芭蕉記念館英語俳句大会」実施報告

―英語俳句は今や世界共通語―

大会実行委員長　大場　登

令和六年度、山形市制施行一三五周年という記念すべき年に、第十六回山寺芭蕉記念館英語俳句大会を開催できたことを嬉しく思います。

応募の締め切りは八月下旬でしたが、厳しい暑さにもかかわらず、日本全国だけでなく、海外二十九カ国からも作品が寄せられました。今回は、二三九七名の方々から合計三三八九句（昨年は海外三十一カ国から二三五八名、三〇八九句）の応募がありました。

審査を進める中で、英語俳句に対する理解や創作意欲、そして表現力がますます向上していると強く感じました。特に、中学・高校の先生方が英語俳句への関心を深め、自信を持って指導されていることが感じ取られました。

作品のテーマは、例年通り花鳥風月といった自然を詠んだものが多かったですが、今年は戦争の悲惨さや平和への願いを表現した作品が増えたことも特徴的でした。

審査は二段階で行いました。一次審査では全作品を選別し、二次審査で入選作と優秀作を決定しました。審査員は以下の五名です。

- 飯島武久氏（山形大学名誉教授）
- 万里小路 譲氏（詩人）
- 相馬 周一郎氏（公益財団法人山形市文化振興事業団理事長）
- リサ・ソマーズ氏（翻訳家）
- 大場 登（大会実行委員長）

次回も多くの方に挑戦していただき、世界共通語となった「Haiku」を通して、人類愛や自然への愛を深める機会となることを願っています。

以下、各部門の最優秀作品をご紹介します。ぜひご堪能ください。

第1部（一般：日本人）

佐藤浩章さん 香川県まんのう町

epitaphs
like ocean trenches,
Okinawa's mourning day
海溝のごとき碑文や沖縄忌
（作者訳）

第1部（一般：外国人）

Milan Rajkumar さん（インド）

endless war–
on broken border pillars
frozen white flags
国境の 杭に白旗　戦止まず
（飯島武久訳）

第2部（高校生）

尹はなさん 山形県小国町（基督教独立学園高等学校3年）

A silent night
A cold breeze rewrites
A white forest
静かな夜 冷たい風が描きかえる
白い森（作者訳）

第3部（中学生）

Sebastian Ciobica さん（ルーマニア）（"Elena Rareș" School, 6th grade）

wind-brushed pond
an origami boat pushes
the day moon
池の風 昼の月押す 紙の舟
（飯島武久訳）

事業報告

第31回 文化セミナー 芭蕉を生んだ江戸文化

―江戸の文化から芭蕉を探る―

第三十一回文化セミナーは、「芭蕉を生んだ江戸文化」をテーマに三回の連続講座として開催され、三人の講師の各分野の視点からアプローチすることによって、芭蕉の俳諧に江戸時代の文化がどのように影響を与えたのかを考えました。

山本陽史氏

原 淳一郎氏

佐藤 琴氏

十一月二日は、放送大学山形学習センター所長・山形大学名誉教授の山本陽史氏の「江戸の「お勉強」―芭蕉たち文学者はどうやって古典の知識を身に付けたのだろうか？」。芭蕉は『奥の細道』を執筆するにあたり『源氏物語』や詩人杜甫の「春望」などの知識を背景にしていますが、芭蕉はこれらの古典をどのようにして身に付けたのか、芭蕉や江戸時代後期の戯作者山東京伝を例に、江戸の文学者の勉強方法を探りました。

十一月九日は、米沢女子短期大学教授の原淳一郎氏の、「近世文学における芭蕉の位置」。『奥の細道』は永らく学校教育のなかで近世文学の代表的作品と教えられ、一般の多くの方にもそのように認識されていると見られます。しかし、本当に『奥の細道』は近世文学の代表的作品と言えるのか、芭蕉と俳諧を近世文学に位置づけながら『奥の細道』の意義を再検討しました。

十一月二十三日は、山形大学学術研究院教授の佐藤琴氏の、「山形の山と版画」。江戸時代、出版業が盛んになり、浮世絵や書籍が商品として流通するようになります。芭蕉が訪れた山形の山を描いた江戸時代の出版物をとりあげて、山に対する人々の関心と描き方の変化について紹介し、それぞれの作品について考えました。

募集

第68回 全国俳句山寺大会

【選者】高野ムツオ・鈴木正子・伊藤 寛・大類つとむ・牧 静・伊藤ふみ（敬称略）

【日時】令和七年七月十三日（日）
午前九時受付開始

【大会参加費】一、〇〇〇円（当日受付にて）

【大会投句】嘱目二句（午前十一時締切）

【賞】高野ムツオ先生
特選一句 賞状・選者色紙染筆
秀逸十句 こけし
佳作五句 賞品
その他の先生
特選一句 賞状・選者色紙染筆
秀逸三句 選者短冊染筆
佳作五句 賞品

俳句大会 次第

〔午前十一時 開会〕
大会式典（主催者・来賓挨拶、選者紹介）・兼題句（事前投句）選評
〔昼食休憩後〕
講演 高野ムツオ先生
入選発表・選評・表彰
〔午後四時終了予定〕

※大会参加者には記念品を進呈いたします。

事業報告

山形市制施行135周年記念

企画展 収蔵名品展 ―書画の美―

山寺芭蕉記念館の収蔵品の中から芭蕉や蕉門の俳諧に限らず、広い分野から名品を選んで、令和六年十二月二十日から二〇二五年二月十七日まで公開したのが企画展「収蔵名品展 ―書画の美―」です。

「Ⅰ 室町時代から江戸後期までの書画」のコーナーでは、一休宗純の《「諸悪莫作」一行書》、黄檗三筆の一人、即非如一の《観音自画賛》、松尾芭蕉の書は山形市指定有形文化財《「会式」懐紙》など五点を展示しました。「Ⅱ 近代・現代の絵画―明治から令和まで―」では、日本画家・番場三雄氏から前年度にご寄贈いただいた日本画《エローラ》、《ペシャワールの仏陀》、《仔牛》の3点を含めて展示しました。

《エローラ》番場三雄画 平成十四年（二〇〇二）

アプローチ・芭蕉&日本文化 16

子規「はて知らずの記」の意味

山本 陽史（はるふみ）

俳人・歌人正岡子規は明治26（1893）年7月19日から8月20日まで東北地方を旅した。この年は芭蕉200回忌にあたる節目の年で、それに合わせて芭蕉の『奥の細道』の旅の足跡を追体験し、旅行記「はて知らずの記」を執筆することが目的であった。

当時記者として勤めていた新聞『日本』の連載企画で、子規は原稿をその都度新聞社に送り、7月23日から9月10日まで21回にわたって連載された。

『子規紀行文集』（岩波書店、2021）の復本一郎氏解説に以下のような子規の述懐が紹介されている。旅先で連日のように執筆することはそうとうに大変だった。炎天下を歩いてから宿に入っても疲れてしまって筆を執る気になれないので、翌朝起きて涼しいうちに執筆して東京に送っていた。すると出発する頃には暑くなってしまい、炎天下を歩く羽目になってしまう。このように定期的な送稿は子規にとってはかなりの難事業であった。

ただし、芭蕉の元禄の旅は主に徒歩によったが、子規は明治24年に上野・青森間が全通していた東北本線を活用している。一方で奥羽本線・羽越本線は未開通であった。

そのため、子規の行程は必ずしも奥の細道に忠実でなかった。行程を挙げてみよう。鉄道で上野を発って初日は宇都宮泊。白河・郡山・二本松・福島・飯坂温泉・仙台・松島・作並温泉に宿泊し、開通したばかりの関山トンネルを抜けて山形に入ったのは8月6日のことであった。館岡・大石田・古口・酒田・大須郷（象潟付近）・本荘・道川（旧秋田県岩城町内）・一日市（ひといち、八郎潟南部）・秋田・大仙・湯田・黒沢尻（現北上市内）を経て、8月19日に水沢に鉄道で移動、その日の夜汽車に乗り、翌20日に東京に戻った。

宮城県から山形県に入るのに「土木県令」と言われた初代山形県令（知事）三島通庸が開通させた関山トンネルをショートカットに使った。また、時々人力車を利用した。新聞というマス・メディアへの連載、旅先からの送稿することを可能にした郵便制度など、子規は文明開化の恩恵をいっぱいに受けていた。

子規はこの旅の途上、各地で句や和歌を詠んだ。芭蕉が奥の細道の旅で詠んだ句を意識した作品が見られる。いくつか例を挙げてみよう。

撫し子やものめづらしき昔ぶり

作並温泉から関山越えの途中、子規はつづら折りの坂道で10歳ほどの少女とすれ違う。昔風の袴をはいているのに心惹かれて詠んだ句である。奥の細道の那須野で「かさね」という女の子と出会ったという芭蕉の句「かさねとは八重撫子の名なるべし」を意識した句。

山を出ではじめて高し雲の峰

関山トンネルを抜けて山形盆地に降りていく途中の吟。芭蕉の月山の句「雲の峰幾つ崩れて月の山」と鶴岡の「めづらしや山をいで羽の初茄子」をふまえる。

ずんずんと夏を流すや最上川

大石田のところに出る句。芭蕉の酒田の句「暑き日を海に入れたり最上川」をふまえている。

「はて知らずの記」の中で子規は次のように芭蕉への傾倒ぶりを記している。芭蕉の足跡を辿っていると全ての場所が名所旧跡だと思える、芭蕉がこの道を歩き、この風景を見たのだろうか、と考えるだけで200年あまり前がしのばれ、芭蕉の旅姿が目に浮かぶようだ、と。

このように芭蕉への傾倒ぶりを隠さない子規だが、この旅の少しのち、俳句革新を唱えて芭蕉を否定的に論じるようになる、このギャップはどうして生じたのだろうか。実はこの旅中の子規の体験が原因ではないかと私は考えている。

出発から2日後、7月21日付けの手紙にヒントがある。郡山の宿から郷里の愛媛県松山の後輩である河東秉五郎（へいごろう、のちの俳人碧梧桐）に送った手紙に次のようなことが書かれている。

この旅では、各地の俳諧師を訪ねて交流しようと考え、東京の宗匠の紹介ももらい、すでに2人の宗匠を訪ねた。ところが何とも恐れ入った状況で、もはや今後は宗匠訪問を止めようかと思うくらいである。俳句談義をしようとしても相手はどうにも不勉強でほとんど見識がなく、ありふれた噂話程度の話題しかない。それどころか子規を若輩（この時数えで27歳）とみてあなどり、1人は東京の宗匠「幹雄」に入門せよと勧められたり、別の人には全く取り合ってくれないありさまであった。

以上のように手紙で子規はぼやいている。「幹雄」とは東京で一家を成していた俳人三森幹雄のことで、福島の石川郡出身で、福島在住の俳人たちの誇りであったのだろう。

このような宗匠たちが勢力を張っていることを目の当たりにした子規の落胆と怒りぶりが伺える。彼らがよりどころにしていたのは芭蕉であった。彼らは芭蕉を「俳聖」として神格化しその権威にすがって、江戸時代さながらの旧態依然たる俳風を守ろうとしている、と子規は感じたのであろう。

子規はこの体験をきっかけに、俳句を革新するためには芭蕉という「偶像」を破壊するしかないと考え、あえて芭蕉を否定する言説を展開したのではないだろうか。

そうだったとしても、子規が芭蕉を高く評価していたこともまた間違いない。子規は河東秉五郎への手紙の中で、次のようにも記す。

西洋文明の利器である鉄道と徒歩行脚を併用しての旅で気楽ではあるが、今のところ名句は一句もできず困っている。そこで、名句は「菅笠ヲ被リ草鞋を着ケテ世ニ生ルルモノナリ」と明言したい。

と言う。いかにも子規らしいまことに性急な議論ではあるが、旅を手段として名句を作り出し蕉風を完成していった芭蕉の戦略を子規はきちんと理解していたのであろう。ともあれ「俳諧」から「俳句」への歴史的な転換を考える上で「はて知らず」の旅は実に興味深い。

（放送大学山形学習センター所長・山形大学名誉教授）

収蔵品紹介

紫式部『源氏物語』伝説による俳画と賛

中野　沙恵

紫式部詠月図自画賛　一幅

紙本墨画淡彩
野々口立圃 筆
江戸時代（一七世紀）
穎原退蔵・尾形仂コレクション
八三・二×二六・〇㎝

〔解読〕
八月十五夜の月湖水にうつりけるを見て、有門・空門・亦有亦空門・非有非空門のことはり、夢まぼろしの世中を思ひとりて、まき〳〵にあらはされし事、世々の人のことばの玉なるべし。
ありやなしやうそもまことの花の種
立圃印（松翁）

〔口語訳〕
旧暦八月十五日の満月が琵琶湖に美しく映っているのを見て、（紫式部が）有門・空門・亦有亦空門・非有非空門の四門の道理やはかない夢・幻のこの世を悟って、『源氏物語』の巻・巻に著わしなさったことは、世代をかさねて多くの人々の、美しい玉のような言葉となったことであろう。
ありやなしやうそもまことの花の種（真実であるかそうでないか、嘘もまことの美しい花を咲かせる種であることよ）

〔解説〕
『源氏物語』の作者紫式部は、石山寺に参籠して眼前の琵琶湖上の八月十五夜の月を見て、その月明で仏前の大般若経の料紙に『源氏物語』の筆を起こした、という話が『石山寺縁起』に記され、広く知られるようになった。この話は中世に形を成したものだが、石山寺には現在も本堂の一隅に「源氏の間」という部屋がある。本作品は、その伝承を基に、発句を添え、紫式部が文机で執筆している姿を描いている。
滋賀県大津市にある真言宗の石山寺は本尊如意輪観世音が祀られており、奈良時代以来観音の霊所として尊崇を集め、平安時代にも宇多上皇や藤原道長ら貴顕をはじめ、紫式部、和泉式部、赤染衛門など女流歌人も多く参籠祈願した寺であった。
前文にある「有門・空門・亦有亦空門・非有非空門」は、仏教の真理を悟るための四つの門（見方）をそれぞれあらわす。「有門」は、無相（ものには固定的な実体がないこと）の理を悟り菩薩・仏の証位に至ることができる、と説く教え。「空門」は「有門」の対で、一切の存在や現象は空（もろもろの事物は縁起によって成り立っており、永遠不変の固定的な実体はない、ということ）であると説く教え。「亦有亦空門」は、衆生が有する一切の偏執を排するために、諸法は有とも空ともいえる、と説く教え。「非有非空門」は、有と空（存在と非存在、あるいは肯定と否定）という、世俗の判断を止揚・離脱することを説く教えである。
発句の「ありやなしや」は、真実であるか否か、の意。また、真実と嘘とは表裏一体であることを「うそもまことの花」と表現し、物事の結果を生み出す基因となる「種」に、嘘もまことなる花の種であることよ、と言いかけた。『源氏物語』五十四巻に描かれる人間模様や物語の展開などを僅か十七文字で言い表している。
作者の立圃は野々口氏。文禄四年（一五九五）京都に生まれ、寛文九年（一六六九）七十五歳で没した。名は、親重、通称、庄右衛門など。別号に松翁ほか。雛屋と号して雛人形屋を営み、紅紛染めにも巧みで紅紛屋とも呼ばれた。連歌、和歌を学び、俳諧も立圃流の一門を擁し、『俳諧発句帳』『小町躍』『はなひ草』ほか俳書の刊行も少なくない。また、『源氏物語』を要約した『十帖源氏』や子女向けの『おさな源氏』の業もある。六十歳ごろから始めた画を配した発句や俳文は多く、雅趣に富み、俳画の先蹤とされている。

（聖徳大学名誉教授）

やまでら歴史民俗散歩 30

山寺の羅漢像

― 風穴に残された石像 ―

平成二十一年（二〇〇九）に山寺の郷土史家新関孝夫氏（一九三八～）の調査によって、山寺立石寺山内の風穴内に羅漢像が発見された。

その羅漢像は、江戸時代の往来物『山寺状』（享和十一年〔一七二六〕刊）や、江戸時代の山寺の文人遠藤周鶴（しゅうかく）によって文化年間（一八〇四～一八）に描かれた「山寺 寶珠山立石寺図」[註1]の中の「十六羅漢」の表記によって、天華岩を含む岩場の下方に存在が示されてきていた。しかし近年、文献等で紹介されることもなく、その存在が忘れ去られていた。前述、新関氏の調査はそれに対する疑問から始まるものだった。

山寺立石寺山内の羅漢像

羅漢像のある岩場（右下の風穴）

羅漢は、正式には阿羅漢といい、一切の煩悩を断って供養されるべき境地に至った者を称する。十六羅漢、十八羅漢、五百羅漢などが彫像・図像で表され、十六羅漢は神通力・説法に優れた賓頭盧（びんずる）尊者を筆頭にした羅漢たちを示している。

新関氏によって確認された羅漢像は、天華岩下方の岩場にできた風穴内に三体存在していた。大きさは、側に近づくには岩場で活動する経験と本格的な装備が必要とされるであろう急峻危殆な場所に位置するため、今のところ遠方からの目測する他なく、高さ約四十cmくらい。制作年代については江戸時代と見られている。[註2]

羅漢像は、風穴内の凹凸を利用して固定したと思しき角材の様なものを梁として、そこに据え置かれていると見受けられるが、三体の内一体は梁から外れ落ちかけている。十六羅漢ということであるから、十六体が存在するはずであるが、観察地点から死角に存在するのか、それとも長い年月を経るうちに落下してしまったのか、残り十三体は確認できていない。

これら三体の羅漢像は通常は遠方より観察するしかない訳であるが、更にその上で落葉の時期でないと木々の葉に邪魔され見通し難（にく）い。そのため、いいつしか羅漢像は忘れ去られてしまっていたのでないだろうか。この羅漢像が誰によって祀られたのかも不明である。今後の更なる調査が待たれよう。

（本館学芸員　相原一士）

［註記］

註1『山寺芭蕉記念館だより』№三十四 やまでら歴史民俗散歩29「宝珠山 立石寺図」に見る江戸時代中期の立石寺の姿」二〇二三 参照

註2『山形市文化振興事業団紀要』第十二号「宝珠山立石寺の未調査仏像の報告 ―古十王像及び十六羅漢伝承に基づいて―」相原一士 二〇一〇

〔写真提供〕新関孝夫氏

〔参考文献〕

『山寺芭蕉記念館紀要』第四号「『山寺状』について」武田喜八郎 一九九九

『山寺芭蕉記念館紀要』第四号「資料紹介〔山寺寶珠山立石寺図〕」相原一士 一九九九

『山形市文化振興事業団紀要』第十二号「宝珠山立石寺の未調査仏像の報告 ―古十王像及び十六羅漢伝承に基づいて―」相原一士 二〇一〇

山寺芭蕉記念館だより No.36

令和七年三月二十八日発行

編集・発行　（公財）山形市文化振興事業団
山形市大字山寺字南院四二二三
電話 〇二三（六九五）二二二一

印刷　株式会社フロット

■開館時間：午前9時～午後4時30分
■入 館 料：大人400円（20名以上の団体は320円）
小中学生・高校生は入館無料。
障がい者手帳をご呈示の方は無料。
■休 館 日：展示替のための休館日あり（お問い合わせ下さい。）
令和7年度の年末年始休館は12月28日～1月4日
■交　　通：JR 仙山線「山寺駅」から徒歩8分。
山形自動車道「山形北 IC」から車で約20分。

お茶席のお知らせ

下記のとおり、お茶席を開席しております。どなたでもお気軽にご利用ください。

市民茶会　一服〔抹茶又は煎茶とお菓子〕…… 800円
場所：山寺芭蕉記念館 茶室
日時：4月20日(日)、5月11日(日)、5月18日(日)、11月9日(日)〔各日午前9時～午後3時〕

茶房 芭蕉堂　一服〔抹茶とお菓子〕… 500円入館料とのセット券をお求めの場合770円
場所：山寺芭蕉記念館 談話室または茶室
日時：午前10時30分～午後3時30分（市民茶会の日、及び休館日は休席）

ホームページ https://yamadera-basho.jp

HP